



日本中世における名器伝承の研究：
名笛説話を中心に

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2024-02-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 妹尾, 恵里 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/0002000326

日本中世における名器伝承の研究 ―名笛説話を中心に―

人間社会システム科学研究科 人間社会学専攻言語文化学分野
学籍番号 3191105003 妹尾 恵里

論文要旨

本論文は、日本中世における名器伝承を論じたものである。本論文で扱う「名器」とは、宮中の宝物もしくは楽家の名物として、特に固有名を書物に記される楽器である。ここでいう楽器とは、日本の中古中世において、特に宮中や寺院等で行われた舞楽管絃に使用された楽器横笛・笙・箏・篳篥・琵琶・箏・和琴・鞆鼓・鉦鼓・大太鼓等を指す。今日で言うところの、いわゆる「雅楽」に使用される楽器に相当する。これらの名器にまつわる由来や逸話などを「名器伝承」を呼ぶこととする。

名器伝承のうち、本論文では、主に横笛説話に注目し、様々な位相にある伝承を取り上げ、同話や類話、周辺資料などと比較検討することで、それぞれの伝承を必要とする意図や名器伝承の中での位置付け、名器伝承全体の意義を考察する。構成は次の二部五章に序論・結語を加えた。

序論では、本論文において扱う対象となる名器伝承がどのようなものを指すのか、改めて定義し、関連分野の近年までの研究状況を整理した。また、本論文の目的等を述べた。

第一部「宮中の御物とされた名器」では、『枕草子』においてすでに宮中の名器として挙げられる、横笛「葉二」「水龍」について取り上げた。この二つの横笛は、宮中の名器であったことをはじめ、院政期以降の書物に靈異譚が記され、「宇治の宝蔵」に納められたとされることなど、共通点も多い。しかし、「葉二」は靈異譚と別に命名由来譚を持つが、「水龍」は靈異譚が即ち命名由来譚となっており、それぞれの伝承の位相は異なるようであるため、それぞれ検討した。また、これらの伝承の展開の一例として、横笛「青葉」の伝承についても論じた。

第一章「横笛「葉二」伝承と撰関家」では、横笛「葉二」の伝承を取り上げた。源博雅が鬼と笛を交換する話と、浄蔵が鬼の感応を得た話、天皇が蔵人を介して「入道殿」から笛を召し上げようとした話、笛に葉が二枚ついていたという命名由来の説話である。この説話は、『江談抄』『十訓抄』など、音楽に特化しない書物に、天皇や撰関家との関わりを示す伝承が記されることが特徴的であった。そこで、伝承の諸相を改めて概観・整理して考察し、靈異や、王権・撰関家との関りを語る説話が付随することで、名器として権威付けられたものであり、名器伝承の型の一つであると結論づけた。「葉二」は、実体と名が先にあって、そこに説話が付随したものであった。また、「宇治の経蔵（宝蔵）」に納められたとされることは、実体が失われたとしても、言説の世界で永遠化・特権化される効果があったことを確認した。

第二章「横笛「水龍」伝承の位相」では、『古事談』等に記される、「水龍」の由來說話を取り上げた。すなわち「唐人が本朝に渡る際、航海に支障をきたしたので海の龍神に笛を捧げて難を逃れたが、後に、商売で儲けた千両を龍神に捧げて笛を取り戻す。その笛を本朝の貴人が買い取る」という説話である。最終的には「宇治の宝蔵」に収められたとされる。「水龍」の由來說話は、「海神に供物を捧げ、海を鎮めて無事に航海した」という話型を取り入れながらも「金千両で龍神から取り戻す」という点や、演奏場面が記されない点特徴的であった。そこで、「水龍」説話を構成する要素について検討した。「水龍」という名の実在の横笛が先にある、龍神に求められた説話が後に付加されたものであること、演奏場面を伴わないことで、笛の価値を高めるという単一の目的のために構成された説話であることを結論とした。

第三章「実体への意識が失われた名器伝承のゆくえ―「青竹」「葉二」から横笛「青葉」伝承へ―」では、横笛「青葉」の伝承を取り上げた。「青葉」の名は『枕草子』や『江談抄』には見られず、『続教訓抄』では「葉二」や「青竹」の別名として記された。しかし近世以降に「青葉」は、『平家物語』では「小枝」等であったはずの敦盛の笛として知られるようになる。『十訓抄』の諸本等から、「青葉」は「青竹、葉二」と列挙される資料からの誤脱によって生成された名であり、名のみの実体のない名器であったことを指摘した。『枕草子』で名器に数えられた宝物たちの中には早くに実体を失ったものもあつたらしいことから、実体を失った名器の名が後世に混同され、名のみ全く別の名器として伝承され、虚構を含むような伝承の中に取り込まれて伝えられる場合があつたことを考察した。

第二部「楽人たちと『続教訓抄』に記された名器」では、楽人たちとゆかりの深い名器について考察した。『枕草子』や『江談抄』に記される名器は、宮中の宝物、もしくは貴頭が所有するものであつた。『続教訓抄』『體源抄』では、このような名器に続けて、先行する書物には見られない名器が多数記されている。楽人の手に成る楽書において記される名器は、楽家の宝物であり、楽人の愛用の楽器であつたと考えられ、第一部で取り上げた宮中の宝物とは位置付けが異なる。そしてそれは、付随する説話の傾向にも影響するものと考えられる。このような名器のうちには、名手と謳われるような楽人の逸話とともに伝えられるものがある。『続教訓抄』に記される説話として、楽人の靈異によって名器となる「海賊丸」と、貴頭に求められるが楽人が断る「大丸」「虎丸」「下腰丸」を取り上げた。『続教訓抄』の意図を視野に入れつつ、それぞれの説話の位相を検討した。

第一章「箏篋「海賊丸」説話の諸相」では、箏篋「海賊丸」の伝承を取り上げた。和邇部用光が、箏篋の演奏によって海賊の難を逃れたという説話である。「海賊丸」説話は様々な書物に同話が採られ、人口に膾炙していたものと考えられるが、特に『続教訓抄』が、説話の細部が異なる種々の同話を網羅的に併記している点が特異であつた。この点に注目して、同話の諸相を確認しつつ、『続教訓抄』の意図を考察した。『今鏡』等の、比較的早い時期の記録では、箏篋に名があるかどうかについては記されないことから、本話の原型は用光という音楽の名人による、芸道感応説話と呼べるものであつたと考えられる。それが、地下楽人達の手になる楽書類に伝承される過程で、名器の命名由來說話の性格を帯びるようになって

た。また、本話は伝承される中で「秘曲」の要素が付加されたことを改めて指摘し、『続教訓鈔』の同話の併記には、地下楽人の立場の正当性の主張のために、楽人と名器とを結びつけた説話を数多く収集しようとする意図があったと結論づけた。

第二章では、「横笛」「大丸」「虎丸」「下腰丸」説話の背景として、狛朝葛による楽書『続教訓鈔』における横笛伝承を対象とし、貴顕に求められる横笛の説話に注目した。『続教訓鈔』の横笛伝承には、天皇や上皇の手に渡るなど、貴顕との結びつきが語るものが目立つ。その中で、「大丸」「虎丸」「下腰丸」の伝承は、橘俊綱が強引に笛を召し上げようとして失敗に終わるといった内容が特徴的であった。これらの伝承の登場人物の人間関係等、説話の構成要素を確認し、上位者に価値を認められるという点で位相を同じくすることを指摘した。また、上位者から価値を認められたとしても大切な笛をそう簡単に手放さないという点には楽人の矜持が示され、楽人の手に成る楽書に記される名器伝承の中で必要な要素であったことを結論とした。

以上の五つの事例の考察から、結語では、本論文を総括し、王権を荘厳するものと楽人の立場の正当性を主張するものの二系統に分けられるという名器伝承の性質を指摘した。また、宮中の宝物の名のユニークさから命名由來說話が求められたことを契機に生み出され、音楽の家の確立とともに楽人の矜持を支えるものとして広がりをもせたという展開の様相を概観した。